

文=伊藤亜紗

右と左という観念を消去してしまえば、死を擬似的に体験できるのではないだろうか？右と左という観念は、言葉でもって定義することはできない。それに意味を与えることができるのは、ただ自分の体のみだ。自分の体を基準にして、心臓のないほうが右、あるほうが左。登壇者が聴衆に向かって「みなさんから見て右」などと言うときにも、やはり彼は、頭のなかで自分の体を客席にすわらせ、それを基準にして「右」と判断している。相手にとっての右左がわかるためにも、自分の体が必要なのだ。右と左という観念が消えるとき、それを意味的に支えていたこの体もまた消えているに違いない。自分の体を手放す、つまり死だ。

ではどうしたら右と左の観念を消すことができるのか？まず思いつくのは、形態学的な方法だ。右と左という観念が生まれるのは、人間の体が、左右方向につぶれた平べったい形をしているからに他ならない。ということは、この体を円柱に近い形にまで変形すれば、おのずと左右の観念は消えているはずだ。とはいえ、いきなり円柱では難しいので、さしあたり前後の軸に注目するのがいいだろう。つまり、前後の軸を左右の軸と同じくらい堅固なものにすることによって、十字柱の形をめざすのだ。

そもそもなぜ人間にとって前後の軸は左右の軸ほど堅固でないのか。それは、右腕と左腕、右眼と左眼、右脚と左脚など、右左の諸器官のあいだにはいくつもの対称関係が見出せるのに対し、前後にはこのような対照関係をもつ器官が存在しないように思われるからである。このような体でもって考えるから、「前後対称」という言い方じたいが、何か意味を欠いているように思えてしまうのだ。しかし本当にそうだろうか。自分の体をもう一度注意深く観察するならば、前後対称の関係をもつ器官が見つかるのではないかな？

重要なのは、右腕と左腕の関係ではなく、右腕と右脚の関係なのである。すっかり見逃されているが、人間の腕と脚は、明らかに前後対称の関係を有している。腕は後ろに曲がることによって肘をつくり、脚は前に曲がることによって膝をつくる。人間が走る姿は、まさに前後の対称性を追いつめていくかのようだ。あるいは鼻柱と脊柱。鼻柱は顔の中心線に沿って前方へ固く突出し、脊柱は骨盤に向かってゆるやかにカーブを描く。ともに内部に空洞を擁している点を考えても、これらは互いに相手を反映する前後対称な器官ではないだろうか？あるいは、口と肛門、乳房とお尻、胸筋と肩甲骨といった器官のあいだにも、明らかな前後対称の関係が見て取れる。

あるいは別の少し乱暴な方法として、右と左の仲を裂く、というやり方も考えられる。自分の右側と他人の左側、あるいは自分の左側と他人の右側のあいだの関係を重視し、自分の右側と自分の左側のあいだにある対という感覚を無効にしてしまう、あるいは少なくとも「地」に追いやってしまうというものだ。自分は右手に箸をもち、他人の左手がもった茶碗からご飯を食べる、あるいは別の人の右手がファスナーを開けようとしていたら、左手をそっと添えてやる、といった具合にだ。

ところで先日、こんなことがあった。友人のジーンズの尻ポケットから財布が落ちそうになっていて、私はそれに気づいたので、気をつけた方がいい、と注意した。彼はありがたうと言って財布をカバンにしまった。事故は未然にふせがれたと思われた。ところがその翌日になって、仕事の帰り道、私はうっかり大切なファイルが入った USB メモリーを電車の中に置き忘れてしまったのである。ふだんならそんなことはしないのに、ペンケースを膝の上に広げたまま眠り込んでしまい、どういうわけか、USB メモリーだけがそこから抜け落ちたのだ。私は、友人への忠告が、ブーメランのように返ってきて自分の額に突き刺さるのを感じた。私は友人に忠告したつもりだったが、ちがった。忠告されていたのは私だった。あのとき、友人の皮財布は、左のポケットから半分以上落ちそうになりながら、体を張って私に教えていたのだ。USB メモリーを持つ右手、気をつける、と。

今の例は、果たして右と左の仲を裂いたことになるのだろうか？少なくとも、ものを無くす、という事態は示唆的である。ものを無くす瞬間というのは、厳密にいつなのだろうか。飼い犬が飼い主の手を離れて野良犬になるのはいつなのだろうか。眠ったからといって私はそれを無くしたわけではないし、犬のことを考えていなかったからといって犬が野良犬になるわけではない。USB メモリーを無くす瞬間、何が起ったのか私は知らない。だから、その瞬間実はあなたはいなかったのではないかな、と言われても反論できない。私の不在を突くようにして、友人の財布が現実を制したのである。忠告と予言とは紙一重である。どちらも同じ「無くすぞ」というメッセージだ。私の右手は友人の財布が発した予言に奪われ、現実的に USB メモリーを無くすということが起こってしまった。友人の左側が私の右側をたぐり寄せたのだ。

右と左の観念消去する方法は、他にもありうるだろう。根本的には、「観念」というものじたいを消去することも有効かもしれない。それは、もっとも死に近い死の体験になるだろう。死んでいるのに生きてると言い張って年金をだまし取ったり、人形の髪が伸びたと大騒ぎする人がいるのだから、逆に、生きているのに死ぬことだってできるのに相違ない。デュシャンの墓には「死ぬのはいつも他人です」と書いてあるそうだ。しかし「自分で自分の死を経験する」こともできそうである。これらのオブジェが、私たちを右も左もないところに導いてくれるだろう。正しく用いる者に、これらのオブジェは死を与えるだろう。

文＝伊藤亜紗

忘れ物についてひきつづき考える。忘れ物という出来事は、その瞬間、持ち主が状況をコントロールする力を失ったのである。したがって、「忘れ物」という言い方は本当は正しくない。主導権はすでに物の側に移っているのに、依然として持ち主の側から事態を捉えているからだ。事実在即して言うならば、「持ち主」が「物」を忘れるのではなく、「物」が「持ち主」から離れ、自立したのだ。それは「忘れ物」というより「巣立ち」というべき出来事である。

物が巣立つ。これは比喩ではない。物が、人間にとってコントロールできない存在になったのだ。それじたい自立した系を、つまり生命のようなものを獲得したのである。だとすれば、忘れ物と言われている出来事には、生命について考えるヒントがあるのではないか。もっといえば、生命誕生のヒントがあるのではないか。もちろん、物質と生命はイコールではない。忘れられた物は、生命のため媒体、すなわち身体になった、と言ったほうが正確だろう。物が身体になったのである。

忘れられた物は、持ち主から自らを切り離すことによって身体になった。自分と自分でないものの区別をつける、なるほどこれは生命の第一歩である。一般に生物の「自己保存」と言われているものだ。つまり、蟻が自分のかついでいる角砂糖と混ざってしまったり、水に落ちた瞬間溶けてしまう、ということがないという意味である。一滴の墨は、水にたらずと広がって水と混ざりあってしまうので生物ではない。しかし蟻も死ぬと水と混ざり合う。

ただしこれではまだ生物としては半分である。なぜなら、生物が生物であるためには、自分と自分でないものの区別をつけることに加えて、自分と全く同じかほぼ同じものを作ることができなければならないからだ。いわゆる「自己複製能力」、つまり生殖である。生殖には二種類ある。アメーバの分裂のように自分を完全にコピーして同じものを作る無性生殖、それから人間のように自分とほぼ同じものを作る有性生殖である。もっとも、ゾウリムシのように無性生殖と有性生殖の両方を行う生物もいる。

忘れ物という出来事が自己複製能力を持つとは、忘れ物が繰り返し繰り返し起こることである。ある人が自分の持ち物Aを電車の中に忘れ、また別のある人が自分の持ち物Bを忘れる、あるいは紛失する。ペンケースの中にあっただけの USB メモリーがネットカフェのゴミ箱へ移動し、尻ポケットに入れておいたはずの財布が交番へ移動する。持ち主の意志に反して、物の位置がずらされる。

ところで忘れ物と犯罪は似ている。犯罪においてもまた、忘れ物同様、その決定的瞬間、被害者が、だまされるか抵抗できないかして状況をコントロールする力を失ってしまっているのである。しかし犯罪においては明確な犯人がいる。忘れ物はどうだろうか。私が電車の椅子に USB メモリーを忘れたと考えるのではなく、X が私の USB メモリーを奪い、忘れさせたのだと考えてみることはできるだろうか。

蚊が生き物の血を吸ったり、ヤドリ木が宿主の養分を取ったり、人間が牛の牛乳のみならずその肉を奪ったりするのも、見方によっては犯罪、窃盗罪である。犯罪を肯定するわけではないが、生きるためには犯罪が必要である。

犯罪が起こりやすい地域や時間帯があるように、忘れ物が起こりやすい地域や時間帯もあるはずである。犯罪同士の関係を調べることで犯人を割り出すように、忘れ物同士の関係を調べることによって、生命体 X が、その正体は分からないにしても、その存在くらいは確認できるのではないか。一般的な生き物が、タンパク質という物質的支えを使って自分の遺伝情報を伝えていくように、生命体 X も、USB メモリーや財布という他人の物を物質的支えとして、忘れ物という出来事を伝えていくのである。